九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「べらなり」の和歌 : 古今後撰時代の場と表現

工藤, 重矩
福岡教育大学助教授

https://doi.org/10.15017/16276

出版情報：文獻探究. 6, pp.1-9, 1980-06-08. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

「べらなり」の和歌 古今後撰時代の場と表現

工藤重矩

一

「べらなり」という語は、古今集から拾遺集にかけてやや流行し、その後はほとんど用いられなかった。かつは訓点資料の中には平安初期点から見えるという際立った特徴を持つ故に、この語については訓点語の側からの論及が活発であった。[1] 現在も解説的記述はおおむね遠藤嘉基氏の説に従っている。

ベラナリの語構成が、べ（べしの語幹）・ら（接尾語）・なりであろうこと、訓読語における用法等については、異議をさしはさむ知識を持たない。ただ、和歌における用法等についてはなお検討すべき点があるように思う。実は、そのことは既に森野宗明氏[2]に論があり、遠藤説を修正して妥当である。

森野氏に依れば、ベラナリは男性語ではないし（訓点語だから男性語、それ故和歌になじまなかったというのが遠藤氏説）、古今集時代には既に伝統的和歌用語と考えられており、平安中期以降になると古語的色彩の濃いものとして使用に制約が生じたという。

右の考えを基本的に認めたうえで、更に和歌史との関連の中で、「べらなり」の果した役割、なぜ一時期流行しまた用いられなくなったのか等を考えてみようと思う。

二　べらなりの場

和歌における「べらなり」の表現性は、森野氏によれば、「非直截性を基調とした表現性への志向」であり、「使用者の主体性が強烈に露出することが抑圧され、稀薄化され」て、「強く指定するのではもちろんないし、またそうかといって単に推量するのでもない、微妙なニュアンス」にあるという。

おおむね「べし」の諸意義をもちながら、「べし」と「なり」の中間、つまり推量的断定とでも言うべき語であるということができるのではないかと思われる（この傍線部の言い廻しがベラナリの言い方であろう）。「あゆひ抄」が「デアリソニ思ハルル」と訳すところである。婉曲表現の一である。

右のような、表現主体の朧化が望ましいのはいかなる「場」であろうか。以下「べらなり」の用例を見ながら、「べらなり」と「場」の関連を検討しよう。[3]

「古今集」の読人が判明する中では行平とともに早い時期の遍照の例（三四八番）。

仁和の帝のみこにおはしましける時に、御をばの八十賀にしろがねを杖に作れりけるを見て、かのをばにかはりてよ

める　　僧正遍昭

千早振神やきりけむつくからに千年の坂もこえぬべらなり

をばの代詠であるが、本人が居る所でその人に代って詠む場合、詠者の立場は微妙で、そっくり本人になりきって詠むのではなく、本人でもなく詠者自身でもなく、中間的な立場になることがある。例えば、「伊勢物語」八二段水無瀬の桜狩の段、右馬頭の「狩りくらし」に対して親王が返歌できなかったので、紀有常が代って返しをするが、その「一年にひとたびきます君まてば」の「君」には、彦星と親王とをかけているとされる。純粋に親王にはなりきっていないのである。

遍照の場合も、そのようなあいまいな立場が「べらなり」という形で露呈しているのではなかろうか。更には、宴延でのことほぎの歌にはもともと詠者の主体の顕示は必要としない。賀宴の主催者である親王に対しても、祝われるをばに対しても、一歩距離をおいた（で迄の者として）非人称的立場での詠、それに「べらなり」がよく適したのであろう。

「古今集」賀（三六四）の因香の歌。

春宮の生れ給へりける時にまゐりてよめる

典侍藤原因香朝臣

峰高き春日の山に出る日はくもる時なく照らすべらなり

延喜三年保明親王誕生の時である。因香は典侍であるから、単に一個人としてではなく、その場を（或いは後宮女官を）代表しての賀歌であろう。「くもる時なく照らす」というあるべき未来を断定にはしない。しかし推量でもない。詠者としては断定の心なのだが、それでは強すぎるし、詠者の断定になる。誰が断定し推定しているのかあいまいな形で、あたかもそれが一般的事実であって、詠者はそれを伝えているにすぎないかのような形で表現する。

「べらなり」の働きをこのように考えると、この言い方は、素材（対象）そのものへの断定の保留ではなく、歌の受け手に対する断定の押し付けの保留ということになろう。断定を保留し、判断を受け手に任せてしまうのである。明確な判断を控えるのであるから、人間関係では、上位の者の歌よりも、下位から上位へ贈られる歌にふさわしいであろう。

賀宴・餞宴また懲許などは「べらなり」が効果的に使用される「場」である。遍照・因香の例はその典型である。以下そのような例を示す。

「貫之集」（六八八）

延喜十二年定方左衛門督の賀の時の歌

水底に影をうつして藤の花千代まつとこそにほふべらなれ

同（六九二）

延喜十二年十二月春立つあしたに、定方の左衛門督の、ないしのかみに賀奉るときの歌

岩の上にちりも無けれど蟬の羽の袖のみこそはたぐふべらなれ

同（六九五）

延喜十二年十二月のないしのかみに賀奉れるときの歌

住の江の松の煙はよとともに浪の中にぞかよふべらなる

「忠岑集」（Ⅱ・九三）

左大将の御賀の歌

しほがまのいそのいさごをつゝみもて御代の数とぞ思ふべらなる

右の四例は賀の歌である。「貫之集」のは或いは代詠であるかもしれない。因香の例で述べた如く、それぞれ判断し推量する主体を朧化し、あたかも一般的事実であるかのように表現するのが、賀の「べらなり」の効果である。

次の四首はそれぞれ事情は異なるが、皆愁え訴える歌である。このような場合もあまりに意志が露わになることは憚るべきなのであろう。

「古今集」雑下（九六八）

桂に侍りける時に、七条の中宮のとはせ給へりける御返事に奉りける　伊勢

久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる

伊勢は七条中宮温子の女房であるが、宇多天皇の御子を生んだ。その前後のことであろうか。伊勢は以後も温子に仕えており、女房として変らぬ忠義をいう歌である。

「兼輔集」（Ⅰ・五八）

故ないしのかみのすみ給ひし時、藤壺にて菊の賀、みかどのせさせ給ひけるに

紫の一本菊は万代を武蔵野にこそ頼むべらなれ

故尚侍は満子。満子の姉妹胤子は醍醐天皇の母后。満子の兄弟の定方は兼輔の義父。例の「紫の一本ゆゑに」を引いて恩顧を訴える。

「躬恒集」（Ⅳ・一六八）

（延喜十六年宇多法皇石山御幸の時、近江介兼輔の命により屏風歌を作り、当日は法皇の御舟に近く侍って奉った歌――取意）

いづみにて沈みはてぬと思ひしを今日ぞあふみに浮ぶべらなる

躬恒は旧和泉掾である。後散位だったのであろう。今日の御幸にあい、近江で舟に乗って浮んでいるという。身の浮昇を訴えているのである。

「後撰集」春下（九六）

延喜の御時、殿上のをのこどもの中に召し上げられて、おのゝかざしけるついでに　凡河内躬恒

かざせども老もかくれぬ此春ぞ花のおもてはふせつべらなる

殿上人（おそらくは蔵人）に召されたとは愁訴の好機である。此春、かざした花の面目をつぶしたとは、官に就けぬ嘆きであろう。

これらの歌、「べらなり」で……ノヨウデアリマスと婉曲化することによって、強引な押し付けの印象を薄めようとしているのであろう。まことに場に適した用法である。

次には餞宴での詠を挙げる。

「貫之集」（七二五）

兼輔の兵衛佐、賀茂川のほとりにて、左衛門の官人御春有輔かひへゆくうまのはなむけによめる

君おしむ涙おちそふこの河のみぎはまさりて流るべらなり

「貫之集」（七三四）

師尹の侍従のよませたまふに

遠く行君を思ふに人もみな郭公さへなきぬべらなり

「能宣集」（Ⅰ・三三六）

武蔵守みつすゑが下るに人々別を惜むに

武蔵野のつゞきのこほりつゞきつゝおのおの千代を思ふべらなり

餞宴での詠は、とりわけ貫之や能宣のような「歌よみ」の詠は右の例にも見る如く、個人の感懐というよりは宴主の、或はその場の皆の気持の代詠という性格を持つ。判断の主体を朧化する「べらなり」は甚だ便利な語であったであろう。

「拾遺集」雑春（一〇四五）

京極御息所春日にまうで侍りける時、国司の奉りける歌あまた有りける中に　藤原忠房

古里にさくとわびつる桜花今年ぞ君に見えぬべらなる

「高遠集」（一一）

小野宮の月輪寺におはしまして、桜の花をもてあそばせ給しに

山風に散らでまちける桜花けふぞこぼれてにほふべらなる

「兼盛集」（Ⅰ・七三）

（御かざしのおほいにぬへる）

千代をへて岩の上なる鶴さへぞ君が千年につたふべらなる

忠房のはあるいは躬恒の作であるかもしれない。兼盛のは二首の中の一首である。三者やや事情を異にするが、貫之に奉ったものである。忠房、兼盛のは筐やかざしに付けたものであるから、詠者主体は全く問題にならないし、高遠のも宴席でのことであるから、これまでの諸例と同様に考えることができる。

詠歌主体をあいまいにする婉曲的断定は、歌人が全く享受の場から分離されてしまう屏風歌にあっても有効な方法であったらしい。少くとも貫之は「べらなり」が屏風歌に適した表現であると考えていたようである。

貫之は五八例中二八を屏風歌に使用している。他には、能宣の七例中四、兼盛の三例中二、素性・清正・元輔の一例中一が目につく。躬恒は一五例中二と少いが、題詠的なものの中には、「火箸の銘」（一二五）をはじめ、「ひらの山」（三三）「山越え」（六七）「ゐなかの家の桜」（三〇七）など屏風歌かと思われるものもあり、いわゆる褻の歌は少い。

屏風歌になぜ「べらなり」が多用されたかはむつかしい問題である。屏風歌一般というよりは、貫之の屏風歌にはという性格でもあるから、貫之個人の使用意識の解明が必要である。今そのことを厳密に行うことができないが、「べらなり」の婉曲表現、表現主体の判断の押し付けの抑制という面から推察すれば、次のように考えられようか。

屏風歌は絵の解釈でもある。しかし、絵と共に存在するので、絵と歌が適合しているか否かの判断は、見る者によって差異は有ろう。そこで、歌による絵の解釈を断定的なものにしないで、見る者の解

釈への参加の余地を残しておく、絵を見、歌を見て、「べらなり」――のように思われる、のような様子だ、とあって更に絵を見、なるほどと納得する。そこには見る者の検証を通じての共感が生じるであろう。

貫之の意図に適うかどうか、甚だ不安だが、ひとまず右のように想像する。

以上の諸例を通じて確認されることは、「べらなり」が詠歌主体の個性・意志をあまり必要としない、あるいは隠微にすべき場において好まれたらしいことである。そして、そこには男女による区別は無かったものと思われる。女性の用例が少いのは、賀歌などのおおやけの場での詠進の機会が少いことの結果であろう。

「題しらず」（古今六帖も含めて）を除外して考えると、「べらなり」の使用された歌のうち、いわゆる晴の歌とされる、屏風歌・歌合歌・賀歌に餞宴の歌・奉献の歌・宴席での歌などの、多少とも複数の享受者のいる公的な場で詠じられたものを加えると、八七例になる。題詠的なものは一八例、贈答歌は二一例、題不知（六帖も含める）は四〇例である。[4]

「べらなり」の持つ「場」の傾向は右によって、おおよそ知りうるが、贈答歌、即ち日常的な対人関係の中で詠まれた歌に用いられている「べらなり」について見ておかなければならない。

三　贈答歌のべらなり

贈答歌といっても、伊勢と温子というような、女房と主人という関係は前項の範疇に入る。ここでは恋愛の消息を中心に見よう。

「延喜御集」（二一）

承香殿の女御とて時に物し給ける、すゑつ方に、恨みきこえ給て

ふりぬとてわれにはたゝふひはたやのはなちてこそ思ふべらなれ

「放ちてこそ思ふべらなれ」は帝の心を忖度しているのだが、古びた檜皮屋にたぐえての皮肉を込めた恨み言であろうか。

「後撰集」恋三（七五二）

題しらず　　伊勢

いとはるゝ身をうれはしみいつしかとあすか川をも頼むべらなり

かへし　　贈太政大臣

あすか川せきてとどむるものならば淵瀬になると何かいはせん

「題しらず」とあるが、恋の贈答であるのは明かだから、ここに扱う。時平との贈答である。心変りの激しいあなたをさえ、いつしかと、あすか今日かとあてにしているようですの意。この「べらなり」も一種の韜晦のポーズである。

「後撰集」恋三（七五九）

心ざしありていひかはしける女のもとより、人数ならぬやうにいひ侍りければ　　長谷雄朝臣

汐のまにあさりするあまもをのが世々かひありとこそ思ふべら

なれ

女から、うだつのあがらぬ男と嘲けられて、海人だって自分の一生をかいありと思っているようですよと、婉曲にたしなめたという体であろうか。「思っているように思われます」という屈曲した言い方に、長谷雄の屈折した心情が反映しているのであろう。

「為頼集」（八一）

おもの持ちの、人の物をとるをみて

ひとりしてあまたからむるをものもちもたる綿をぞたづぬべらなる

為頼は兼輔の孫で、十世紀後半の人。御物持が盗みをするのをそれと知ったうえで、「お持ちの綿を探しているようですね」とは、たちの悪い冗談である。直接的でないので、一層効果的である。

「貫之集」（八〇七）

忠岑がもとに

かひがねのまつにとしふる君ゆゑに我はなげきと成ぬべらなり

自分を客体化して、ややユーモラスに表現した歌である。このような、「我は（我身は等）……と成りぬべらなり」の型の歌は他にもかなりある。あるいは誹諧になり、あるいは自嘲になりなどするが、いずれも、自己を客体化していることは共通する。

贈答歌の場合は、具体的な人間関係によって、皮肉・とぼけ・からかい・自嘲・諧謔等々さまざまの趣を持つが、そのような具体的な効果を捨象して見れば、婉曲表現としての基本的性格は、賀歌等で用いられていたものと同様である。

四　和歌史とべらなり

「べらなり」という語が、第二章で考えた如く、公的な場での歌に適したものであると考えられていたとすれば、「べらなり」の衰退の理由を考えるにあたっては、屏風歌の盛衰やそれを荷う歌人の変化ということを顧慮しなければならない。

「べらなり」が使用されはじめたのは何時のことかは判然としない。先学も指摘される如く、人麻呂・赤人・家持等の用例はテキストの問題があって直ちには信ぜられない。万葉集には用例は無いので、万葉以降ということには疑問はない。少くとも和歌においてはそうである。

「古今集」の左注に人麿（六七一）高津内親王（九五九）の作とする歌に「べらなり」が用いられていて、人麿の頃「べらなり」があったと、考えられていたらしいのだが、古今時代の人には、人麿は平城天皇の頃の人と信ぜられていたのである。[5]「読人しらず」に用例があることも考えれば、森野氏の言われる如く、貫之たちにとっては、決して新しい語ではなく、遍照・行平も用いている伝統ある語であったとみてよいであろう。

貫之は屏風歌の最多作者であり、いわゆる「専門歌人」の典型である。「べらなり」は前に見た如く、公的な場での詠に用いられやすい語であり、その使用例はいわゆる「専門歌人」に多い。そこに貫之が多量に積極的に使用した必然性も有るのであろう。

地下の歌よみ（専門歌人）の活躍と消滅の和歌史的意義について

は、既に多くの論がある。[6] 公任の登場、即ち花山朝から一条朝の頃に、地下歌人の役割の終りを見るのも、近藤潤一氏以来動かぬ所であろう。

「べらなり」の使用例が、やはり公任あたりを境としてほとんど見られなくなるのは、[7] 和歌史の動きと無関係ではあるまい。

「べらなり」が貫之によって脚光をあび、地下の歌よみ、あるいは通貴クラスの殿上人歌人を中心に使用されたために、貫之語という印象を生じ、公任などの上流貴族が和歌をリードしはじめると、貫之や地下歌人の多く使用したこの語は、何か泥くさい語と感じられるようになっていったのではなかろうか。

本来、行平の歌や、伊勢の恋歌の例のように、婉曲表現として、多様な用いられ方の可能性を有しており、また実際にも日常的な場でも用いられたのだが、あまりにも貫之が特別な場に集中的に使いすぎたのである。その為に、貫之の用法の亜流を生み出しはしたが、同時に急速に固定化し古びて行ったのである。[8]

「奥義抄」所引の「新撰髓脳」(公任撰)に「かも・らし・べらなどふるきことつねによむまじ」とあるということも、「かも・らし」とは同列に扱えないにしても、「べら」の古さの所以は、地下専門歌人(貫之を中心とする)多用語であること、「場」と密着しすぎたことにあるのではなかろうか。

森野氏の指摘された俊頼・成通・定家・慈円・実朝の用例は、やはり「古語」の意識的使用というべきであろう。

五　場と表現の型

「べらなり」の用法と消長とを考えてみたのは、実は、今一つの問題があるからで、「べらなり」自体の意味用法の検討はそのための予備段階でもある。

それは「べらなり」の用いられる和歌の「場」の特徴についてである。

ある「場」とある「表現」の固定的な結びつきという観点からすると、「べらなり」は賀・餞・愁訴等のいわば侍宴における地下の歌よみの歌と強い関連があるといえよう。

このような関係は「べらなり」だけでは無いと思われる。例えば、「後撰集」巻三(一二五・一二六)、

三月下の十日計に、三条右大臣兼輔の朝臣の家にまかり渡り侍りけるに、藤のさける遣水のほとりにてかれこれ大みきたうべけるついでに　三条右大臣

限なき君におふ、ちの花なればそこひも知らぬ色の深さか

返し　兼輔朝臣

色深く匂ひしことは藤浪のたちも返らで君ともれとか

「大和物語」一七二段

(亭子院は石山寺につれに詣でていた。国司は為に国費の窮乏を嘆いた。亭子院はこのことを聞いて他国の庄園に仰せて御幸を行った。歎き恐れた国司は、帰途を打出の浜に接待の仮屋を設けて待った。ただ、国司は恐れて隠れ、黒主を据えおいた)

（法皇の一行が）おはしまし過ぐるほどに、殿上人、黒主はなどてさてはさぶらふぞと問ひけり。院も御車をさへさせ給ひて、なにしにここにはあるぞと問はせたまひければ、人々とひけるに申しける

さざらなみまもなく岸を洗ふめり渚きよくは君とまれとか

とよめりければ、これにめでたまうてなむとまりて、人々に物給てかへらせ給ひける。

右の二例は共に客をひきとめようとする歌で、構文もよく似ている。客が自分よりは身分の高いかつ大事な客（右大臣定方は兼輔の岳父）であることも同じである。

「AはBとか」の構文は、Aという現象はBという意味であろうか、の意である。藤の花が色深くにおっているのは、あなたに留まってほしいという訳でしょうか、という間接的な言い方は、上位者に対する押しつけがましさを抑制する点で、場に適った言い廻しである。「べらなり」と共通する表現である。

これが逆に、上から押し付ける形だと「とぞ」という言い方になる。

「万葉集」巻十八（四一三六）

天平勝宝二年正月二日於国庁給饗諸郡司等宴歌一首

足引の山のこぬれのほよとりてかざしつらくは千年ほくとぞ

右一首守大伴宿祢家持作

「後撰集」巻二十（一三七九）

今上、帥のみこと聞えし時、太政大臣の家にわたりおはしまして、帰らせたまふ御おくりものに、御本奉るとて

太政大臣

君がためいはふ心の深ければ聖の御代のあとならへとぞ

今上御製

御返し

教へおく言たがはずは行末の道遠くともあとはまどはじ

前者は国司から郡司へ、後者は左大臣から帥親王への歌である。忠平の場合は、一見おかしくもあるが、村上帝がまだ親王の時であり、忠平は親王の後見役でもあるから、保護者の立場の詠である。

「AはBとか」「AはBとぞ」等の型にはまった表現の歌が、共通の場面で用いられる。「べらなり」の和歌も「場」の傾向性を強く持っている表現類型といえよう。

平安和歌が「場」の文学であることは、いうまでもないことであろうが、その具体的な「場」と表現との関係はなお十分に整理されているとは言い難い。その一つの試みとして、「べらなりの場」ということを考えてみようとしたのである。

【参考I】平安中期以前のべらなり使用歌人と歌数

遍照(1)行平(1)千里(2)素性(1)因香(1)棟梁(1)元方(3)聖宝(1)長谷雄(1)伊勢(5)貫之(58)躬恒(15)是則(1)忠行(1)宗于(2)兼輔(1)忠房(1)忠岑(1)民部巫(1)醍醐天皇(1)承香殿女御(1)公忠(2)兼盛(3)実頼(1)敦忠(1)清正(1)元輔(1)順(1)忠見(1)能宣(7)恵慶(2)元真(1)女(元真集 1)好忠(2)能正(1)ただよし(1)忠清(1)為頼(1)高遠

（1）女（高遠集1）重之（1）公任（1）長能（1）　＊中務（1？）
家持（2）赤人（2）読人不知（30）［人丸（1）高津内親王（1）］

【参考Ⅱ】

屏風歌40［貫之（28）能宣（4）躬恒（2）兼盛（2）素性（1）公忠
（1）清正（1）元輔（1）］
歌合17［貫之（2）能宣（2）忠房（1）延喜帝（1）順（1）元真（1）
能正（1）ただよし（1）忠清（1）不明（6）］

注

1　春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』遠藤嘉基『訓点資料と訓点語の研究　改訂版』　鈴木一男『初期点本論攷』など。宮田和一郎「べらなりに就いて」（国語国文　五巻十三号）は用例一五二が列挙されている。

2　「ベラナリということば――位相上の問題を主として――」（国語学　40集　昭35・3）

3　用例検索には、宮田論文を参考にした他、『八代集歌末語索引』を参照し、私家集は『私家集大成　中古Ⅰ』のうち最も歌数の多い一本を用いた。歌合は『平安朝歌合大成』の第五句索引を利用し、貫之集は『紀貫之全歌集総索引』を用いた。表記は適宜漢字を用いた。

4　家持集二例・赤人集二例・土佐日記三例、及び平安末鎌倉の用例は除外した。

5　「大和物語」一五三段に「ならの帝位におはしましける時さかの帝は坊におはしまして」とあり、一五〇・一五一段に「ならの帝」と人丸の唱和がある。

6　上野理『後拾遺集前後』序章研究史参照。

7　歌合では貞元二（977）年頼忠前栽合が最も新しい。

8　固定化ということを、上接語との関連でいえば、二度以上用いられている語は、成る（28）思ふ（20）匂ふ（9）頼む・敷る（7）乱る・帰る（5）通ふ・照す・まさる（4）祈る・流る・泣く（3）まどふ・止む・惜む・尽く・まかす・砕く・たぐふ・消ゆ・いとふ・越ゆ・分く・変る（2）である。表現内容自体も類型化しているのである。型の和歌と認める所以でもある。

補記　投稿後に、『国語学論説資料15（昭53年）』によって、蔵中スミ氏の「歌語『べらなり』の周辺――訓読語と歌語と――」を読むことを得た。拙稿では触れることの無かった「古今集」以前の発生期のべらなりについて詳しい。

――福岡教育大学助教授――